エッセイ

世界へ 世界から

二〇〇六年夏のふたつの映画祭

大森 一樹

この夏、ふたつの映画祭に招かれた。ひとつはアメリカのシカゴで開かれたG-FEST。Gはゴジラので、全米周辺から怪獣ファンが年に一度集まり交流するイベントで、今年で一三回目。講演会やグッズ販売、さまざまなコンテストに映画の上映と盛りだくさん。

アメリカでのゴジラ人気についてはむかしから聞かされていたが、目にするのは初めてで、そのパワーには圧倒された。参加者は三日間で三〇〇〇人近くと聞いた。会場となったホテルに出店されたマーケットでは、フィギュアやプラモデル、ポスターなど日本でも手に入らないような日本製のものがところ狭しと並んでいる。

日本ではマニアとかオタクといわれる特別な人たちの集まりを想像されるが、ここではファミリーが主流で、よきパパが妻と子どもたちと思い思いの怪獣Tシャツを着ている。コンテストも、怪獣の絵や扮装、鳴き声など子ども向けのものが多い。

二本のゴジラ映画を監督したわたしは、参加者の多くから予想もしなかった賞賛と敬意をもって迎えられた。サイン会では何百人という長蛇の列ができ、会場近くの年代を感じさせる大劇場で「ゴジラVSキングギドラ」が上映された後は、スタンディングオベーションまで受けた。

正直なところ、日本では「ゴジラの監督」と言われると、三〇本近くいろいろな映画を撮っているのに、そのうちの二本じゃないかと、あまり快く思わなかった。しかし、このときは「ゴジラの監督」であることを心から幸福に思った。と同時に半世紀以上も前に、日本のクリエーターたちが生み出した映画のキャラクターが、本場アメリカで時代を超えてなおも支持されていることに、日本文化の誇りを感じずにはいられなかった。

もうひとつは、九州大分の湯布院映画祭。今年で三一回目になるというが、全国の至る所で町おこし的な映画祭が生まれては消えていくなかで、ここまで続いているのは唯一といっていい。今回はわたしの新作「悲しき天使」が地元大分オールロケということもあり、ようやく実現した。

こちらの参加者はかっての映画青年たちが主流で、当然年齢層も高い。上映の後のシンポジウムでも辛辣なことばが飛び交うが、自分が映画監督になってからほぼ同じ歳月を通過してきた同世代感覚があって心地よい。彼らの三一年の変わらない映画愛が、この映画祭を支えてきたのだという感慨があった。

映画という文化は、いつの時代でも若さと新しさが求められるものだ。しかしそれだけに目を奪われていると、必ず足元をすくわれる。先駆者たちの歴史と伝統、同世代の観客たちの熱い眼差しを置き忘れて明日は決してないと改めて思い直した夏だった。

おおもり かずき／1952年大阪市生まれ。映画監督。「恋する女たち」(東宝)で文化庁優秀映画賞、第11回日本アカデミー賞、優秀脚本賞・優秀監督賞受賞。「わが心の銀河鉄道～宮沢賢治物語」(東映)で第20回日本アカデミー賞、優秀監督賞受賞。1988年文部省芸術選奨新人賞受賞。大阪芸術大学映像学科同大学院教授。著書に「あなたの人生案内」(平凡社)など。

月刊 みんぱく

目次

NOVEMBER 2006 月刊みんぱく 11

01 エッセイ 世界へ世界から
2006年夏のふたつの映画祭
大森 一樹

02 特集 まぐわう
頭のなかの尾てい骨
近藤 雅樹
耳から心に染み込んで…
佐伯 順子
めぢから—目は口よりもモノをいう—
水口 千里

おやめなさい、そんな歌
齊藤 純
森の民のクマとの絆
佐々木 史郎
グシイ流正統派
松園 万亀雄

08 未来へひらくミュージアム
展示室の柔軟性
—金沢21世紀美術館の試み—
鷲田 めるろ

11 表紙モノ語り
夜道い棒
須藤 健一

12 みんぱくインフォメーション

14 万国津々浦々
震災によるファッション事情
上羽 陽子

15 時論・新論・理想論
18世紀啓蒙主義スペインとアメリカ先住民
—マラスピーナ探検隊の貢献—
黒田 悦子

16 外国人として生きる
地方と世界の橋渡し役をになって
—イラン人大量入国のその後—
庄司 博史

18 地球を集める
クワクワカワクの丸木舟
岸上 伸啓

20 生きもの博物誌
海を渡るオウム
笹岡 正俊

22 フィールドで考える
ベトナム人流遺跡活用法
西村 昌也

24 企画展 世界のおくりもの
こどもとおとなをつなぐもの
次号予告・編集後記

※表紙解説は11ページ